

原 著

臨床実習における作業療法学部学生の 心理的ストレス反応の変化と性格との関連性

東嶋美佐子 井上桂子 日比野慶子

川崎医療福祉大学 医療技術学部 リハビリテーション学科

(平成 8 年 5 月 22 日受理)

Relationship between Personality and Change of Psychological Stress Response in Occupational Therapy Department Students during Clinical Practice

Misako HIGASHIJIMA, Keiko INOUE and Keiko HIBINO

*Department of Restorative Science
Faculty of Medical Professions
Kawasaki University of Medical Welfare
Kurashiki, 701-01, Japan
(Accepted May 22, 1996)*

Key words : occupational therapy department students, clinical practice,
psychological stress response, YATABE/GUILFORD test (YG),
Tokyo University egogram (TEG)

Abstract

The purposes of this study were to determine the degree of stress experienced by students in the occupational therapy department during the course of clinical practice, whether the degree of stress changed according to the students' experiences, and whether the intensity of the stress response had any relation with their personalities.

The psychological stress response scale (PSRS) was used for measurement of psychological stress response. Tests were conducted four times: before the beginning of clinical practice, and after the end of each term. In order to assess the student personalities, the YATABE/GUILFORD test and the Tokyo University egogram were used. These tests were performed throughout the school year, with no relationship to the clinical practice schedule.

The highest PSRS scores were obtained before the beginning of clinical practice.

Although stress declined as clinical practice continued, PSRS scores rose again after the end of the third term, suggesting that stress came from sources other than clinical practice. Furthermore, we observed that students who scored high on the PSRS also scored high on various items in the personality tests, indicating a strong relationship between stress and the personalities of the students.

要 旨

この研究の目的は、作業療法学部学生が臨床実習において、どの程度のストレスを受けているのか、さらにストレスの程度は臨床実習の経験により変化するのか、またストレス反応の高低は性格との関連性があるのかについて知ることである。

方法は、ストレスの程度を測定するものとして心理的ストレス反応尺度 (PSRS と略す) を用い、臨床実習前と各期終了時の計 4 回実施した。性格をみるものとしては、矢田部・ギルフォード検査と東大式エゴグラムを用い、臨床実習に関係のない学年時に実施した。

臨床実習前が最も PSRS 得点が高かった。さらに、実習を重ねるごとにストレスは低くなるが、再び 3 期終了時の PSRS 得点が高くなることから、臨床実習以外のストレス源が推察された。また PSRS 得点が高い者は、性格検査の諸項目の得点も高いことから、ストレスと性格との関連性は強いことが示唆された。

はじめに

現代はストレス社会と言われるように、社会生活を営むほとんどすべての人に起こり得るのが心理社会的ストレスである。

ストレスに対する感じ方には個人差があり、同じストレスでも人によってその程度は異なる。ストレスの感じ方は個人の性格¹⁾や過去の経験などによって影響を受けると考えられる。

今回我々は、理学療法士及び作業療法士を志す学生にとって、卒業前教育では代表的ストレスフル・イベントのひとつであろうと考えられる臨床実習における心理的ストレス反応について調査するとともに、その心理的ストレス反応の高低は性格との関連性が高いという仮説のもとに検討した。

その結果、心理的ストレス反応は臨床実習の経験を重ねるごとに低くなる傾向が認められた。しかし、臨床実習が終了する時期には、次に起ころうとしている事柄に対して、すでにストレスを感じている実態が明らかになった。性格との関連性については、高い心理的ストレス反応を示す性格の者は、経験を重ねても常に高いストレスを受けており、ストレスと性格との関連

性は高いという知見を得たので報告する。

対象と方法

平成 7 年度に、臨床実習を行う川崎リハビリテーション学院作業療法学部学生 20 名のうち、データの収集が可能であった 18 名 (男 3 名・女 15 名、平均年齢 21.83 ± 3.64 歳) を対象とした。

心理的ストレス反応を測定するものとして、新名らによって開発された自己評定式の質問紙法である心理的ストレス反応尺度²⁾ (以下、PSRS と略す) を用いた。

PSRS の質問項目は、情動的反応の 4 下位尺度 26 項目と、認知・行動的反応の 9 下位尺度 27 項目、合計 13 下位尺度 53 項目よりなっている。評定は 4 段階評定 (全く違う 0 点, いくらかそう 1 点, まあそう 2 点, その通り 3 点) で、各尺度の項目得点の合計を算出し、その合計得点が高いほど心理的ストレス反応が高いことを示している (表 1)。

臨床実習は、3 年次に 2 ヶ月を 1 期間として 3 期間行われる。臨床実習施設は全国 37 施設におよび、1 施設につき 1 名か 2 名で実習を行い、ひとりが精神・小児・身体の 3 部門を 1 期間ずつ経験するようになっている。各期間が終了す

表1 PSRS

	下位尺度	項目数	得点	評 定
情 動	抑うつ気分	8	(0~24)	全く違う 0点
	不安	8	(0~24)	いくらかそう 1点
	不機嫌	5	(0~15)	まあそう 2点
	怒り	5	(0~15)	その通り 3点
認 知 ・ 行 動	自信喪失	3	(0~9)	
	不信	3	(0~9)	
	絶望	3	(0~9)	
	心配	3	(0~9)	
	思考力低下	3	(0~9)	
	非現実的願望	3	(0~9)	
	無気力	3	(0~9)	
	引きこもり	3	(0~9)	
	焦燥	3	(0~9)	

るごとに、1週間学校に出校して臨床実習の反省や担任の個人面接、さらには次の臨床実習の準備などを行って実習施設に出発するという計画で行われる。

このような臨床実習の流れの中で、3年次への進級が認められたと同時にされる臨床実習施設の発表後で、担任よりの臨床実習に対する諸注意が終了した時点で、初回のPSRS検査を行った。さらに各期間毎に臨床実習が終了して出校してきた初日の時点で同様の検査を行った。回答者に対しては、「検査日を含むこの、1日2日のあなたの感情や意識や行動の状態をよく表すように数字に○をつけて下さい」という指示を紙面上で行い実施した。

性格を判定するものとして、矢田部・ギルフォード検査³⁾(以下、YG検査と略す)と、東大式エゴグラム⁴⁾(以下、TEGと略す)を用いた。YG検査は、12の尺度の得点と6つの因子間のまとまり及び全体プロフィールの型によって個人の性格を特性的に見るものである。TEGも性格診断を目的とした検査で、5つの尺度の高低により性格パターンの特徴を見るものである。これらの性格検査は、ともに2年生の3学期に集団にて実施した。

YG検査³⁾のデータからは、ストレスフルになると感情や情緒が不安定になるだろうという理由により、6つの因子群のなかで特に対象者全

員の情緒安定因子群(抑うつ性・回帰性・劣等感・神経質)の得点を抽出した。さらにプロフィールの型より、情緒不安定や社会的不適応などを示し性格のアンバランスが著しいと言われているB型者(Black Listタイプ)と、情緒的な問題のためにノイローゼや不適応を起こしやすいとされるE型者(Eccentricタイプ)について調べた。情緒安定因子群の最高得点は80点で、得点が高いほど情緒が不安定である状態を示している。

TEG⁴⁾のデータからは、恐れ・不安・ゆううつなどの感情を抑圧している者はAC得点が高いという理由により、対象者全員のAC得点と、さらに5つの尺度の中でAC得点がピーク値を示す対象者について調べた。またCPとACのみが高得点でNP・A・FCは低得点で、その尺度得点の軌跡がU型を示す者で、これらは自己主張をする自我状態の値が低いためにストレスフルになると葛藤を起こしてしまうという者で、そのU型の対象者を調べた。ACの最高得点は20点で、得点が高いほど我慢して感情が内にこもる状態を示している。

検定はすべてpaired t-testを用い、 $P<0.05$ を有意差ありと判定した。

結 果

1. 臨床実習前及び各期間の臨床実習における心理的ストレス反応

PSRS合計得点については、実習前(48.66±27.46)>1期(34.11±23.99)>3期(32.66±36.73)>2期(29.50±26.50)の順に得点が高くなる傾向がみられた。

実習前と1期($P<0.01$)、実習前と2期($P<0.01$)、実習前と3期($P<0.05$)の間には有意差が認められた。しかし、1期と2期、1期と3期、2期と3期の間には有意差は認められなかった。

情動的反応得点と認知・行動的反応得点については、ともに実習前が最も得点が高かった。さらに、2期の認知・行動的反応においてのみ得点が若干低かった以外には、各期間の得点において大差は認められなかった(表2, 3)。

情動的反応においては、実習前と1期、実習

前と2期、実習前と3期の間には有意差が認められた。しかし、他の期間の間には有意差は認められなかった(表2)。

認知・行動的反応においては、実習前と2期の間のみ有意差が認められたが、他の期間の間には有意差は認められなかった(表3)。

情動的反応の4つの下位尺度については、実習前及び各期間ともに不安尺度の得点が最も高かった(表2)。

認知・行動的反応の9つの下位尺度については、実習前及び各期間ともに非現実的願望尺度の得点が最も高かった(表3)。

2. 臨床実習前及び各期間の個人別心理的ストレス反応の変化

PSRS 合計得点を実習前及び各期間で個人別にみると、常に高い得点あるいは常に低い得点

を示している者がいれば、実習前及び各期間で得点に変動が認められる者もいた。

実習前及び各期間における PSRS 得点が平均値よりも高かった者は、実習前9名、1期7名、2期7名、3期6名であった。

実習前と各期間3回で合計4回の PSRS 検査を行ったが、4回ともに PSRS 得点が平均値よりも高かった者は4名、3回が2名、2回が3名、1回が4名であった。

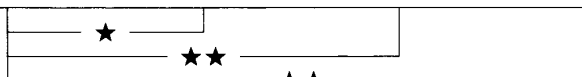
3. 高・低ストレス群と YG 検査及び TEG との関係

対象者18名の実習前の PSRS 得点が、平均値よりも高い者を高ストレス群とし、平均値よりも低いものを低ストレス群として2群に分類した。

この両群間において、YG 検査⁵⁾の情緒安定因

表2 実習前及び各期間の情動的尺度得点の平均値と標準偏差

		実習前	1 期	2 期	3 期
情動的 反 応	抑うつ気分 (0~24)	6.66(5.65)	5.11(3.82)	4.61(4.74)	4.05(5.70)
	不安 (0~24)	12.11(5.81)	5.38(5.58)	5.11(4.75)	7.66(6.10)
	不機嫌 (0~15)	4.38(3.75)	3.05(2.93)	3.00(2.78)	2.50(3.51)
	怒り (0~15)	2.72(3.24)	2.88(2.44)	3.22(3.54)	2.05(3.58)
	合 計 (0~78)	25.88(15.36)	16.44(12.38)	15.83(14.24)	16.27(17.56)



★: P<0.01, ★★P<0.05

表3 実習前及び各期間の認知・行動的尺度得点の平均値と標準偏差

		実習前	1 期	2 期	3 期
認知・ 行 動 的 反 応	自信喪失 (0~9)	2.88(2.76)	2.22(2.14)	1.83(1.88)	1.83(2.47)
	不信 (0~9)	1.50(1.57)	1.22(1.47)	1.11(2.19)	1.05(2.09)
	絶望 (0~9)	1.66(2.35)	0.88(1.32)	0.88(1.40)	1.33(2.27)
	心配 (0~9)	3.33(2.13)	1.66(1.69)	1.66(1.71)	2.11(2.32)
	思考力低下 (0~9)	2.55(2.06)	3.05(2.57)	2.00(1.97)	2.05(2.64)
	非現実的願望 (0~9)	4.77(1.90)	3.77(2.29)	2.33(2.30)	3.33(2.61)
	無気力 (0~9)	2.38(1.86)	1.99(2.01)	1.66(1.74)	2.22(2.90)
	引きこもり (0~9)	1.50(1.57)	1.55(1.60)	1.44(1.75)	1.16(1.94)
	焦燥 (0~9)	2.16(2.14)	1.38(2.13)	0.77(1.39)	1.27(2.27)
	合 計 (0~81)	22.77(14.58)	17.72(13.95)	13.66(14.04)	16.38(19.92)



★★: P<0.01

表4 高・低ストレス群間と性格テストとの関係

高 ス ト レ ス 群	対 象 者	A	B	C	D	E	F	G	H	I	平均 (SD)
	実習前 PSRS	78	49	69	55	54	63	75	128	64	70.55 (22.25)
	1 期 PSRS	89	26	61	30	54	51	21	58	72	51.33 (22.38)
	2 期 PSRS	76	14	24	50	60	23	63	70	37	46.33 (22.62)
	3 期 PSRS	73	38	19	67	53	12	28	150	19	51.00 (43.02)
	YG の E・B 型者	E				B			E		
	情緒安定因子得点	51	22	51	30	46	30	24	57	11	37.11 (13.16)
	AC 尺度得点	12	6	12	13	6	4	6	17	6	9.11 (4.20)
	AC ピーク値者	○			○				○		
エゴグラムU型者	○							○			
低 ス ト レ ス 群	対 象 者	J	K	L	M	N	O	P	Q	R	平均 (SD)
	実習前 PSRS	37	18	23	40	24	18	29	24	27	26.77 (7.41)
	1 期 PSRS	27	12	12	4	39	19	16	3	20	16.88 (11.25)
	2 期 PSRS	14	0	3	10	7	15	4	1	60	12.66 (18.54)
	3 期 PSRS	27	4	12	51	1	7	4	19	4	14.33 (16.14)
	YG の E・B 型者										
	情緒安定因子得点	34	26	13	36	14	29	28	24	22	24.88 (7.71)
	AC 尺度得点	11	2	9	6	0	5	12	5	8	6.44 (3.74)
	AC ピーク値者							○			
エゴグラムU型者											

★★: P<0.01, ★: P<0.05

子の得点は、高ストレス群で高かった。しかし両群間において有意差は認められなかった。さらに、E型を示した者が2名、B型を示した者が1名であった。この3名は高ストレス群に属し、情緒安定因子の得点も高く、対象者全員のなかで上位1・2・3位を占めていた。

TEGのAC得点⁶⁾は、高ストレス群で高かった。しかし両群間において有意差は認められなかった。さらに5つの尺度のうちAC得点がピーク値を示す者が、高ストレス群に3名、低ストレス群に1名であった。U型を示した者は2名で高ストレス群に属していた。AC得点とU型との関連については、AC得点がピーク値を示した3名のなかの2名とU型を示した2名とは同一者であった。

YG検査でE型を示し、情緒安定因子の得点やAC得点が高く、しかも5つの尺度のうちAC得点がピーク値を示し、その得点軌跡がU型であるというこれらの条件をすべて満たした2名は、高ストレス群間において実習前及び各期間のすべてでPSRS得点も平均値以上であった(表

4)。

考 察

臨床実習において、実習前>1期>3期>2期の順にPSRS得点が低くなる傾向が認められた。またPSRSのなかの情動的反応では不安尺度の得点が高く、認知・行動的反応では非現実的願望尺度の得点が高かった。さらに、これらの尺度得点も臨床実習の経験を重ねることにより、ほとんどの尺度において低くなる傾向があった。

臨床実習前のPSRS得点が高かったのは、臨床実習という言葉から学生自身が自分の能力や性格などと照らし合わせて想像したこと、あるいは先輩や教員の臨床実習に対する説明内容から学生自身が想像したことなど、臨床実習の未経験からほとんどの学生が臨床実習に対して「苦」をイメージし、それがストレス源となってPSRS得点においても高い傾向を示したものと考えられる。このような傾向は不安尺度の得点が異常に高かったことから推察される。

しかし、実際に臨床実習を体験することにより PSRS 得点が低くなっていった。また臨床実習前には不安尺度の得点が高いと同時に、非現実的願望尺度の得点も高い傾向にあったが、これらの尺度も臨床実習の経験を重ねることで低くなっていった⁷⁾。このことは臨床実習により起こってきた不安に対して、その不安をまぎらわせるために非現実的願望を持ち、あたかもそれを現実的に可能であるかのように思うことで、不安を軽減しようとしたのではないかと考えられる。しかし、臨床実習を経験することにより、ストレス源となっていたものが減弱したり取り除かれたり、学生自身がストレス源そのものに立ち向かい状況を変化させたり、さらには除去するための対処行動を起こせるようになったことで、不安尺度とともに非現実的願望尺度も低くなったのではないかと考えられる。

臨床実習の経験を重ねることにより PSRS 得点は低くなると考えれば、2 期よりも 3 期の方がより低い結果として現れるべきであるが、結果は逆転していた。これは臨床実習終了後より 1 ヶ月後に予定されている卒業試験が、3 期臨床実習終了時点ですでにストレス源となることが示唆された。

全般的には、臨床実習を経験することで PSRS 得点は低下することが認められた。しかし、対象者の一部には臨床実習前に PSRS 得点が高かった者で、その後の臨床実習において同様に高い得点を示した者があった。このような傾向は、YG 検査では E 型を示し情緒安定因子の得点が高く、しかもエゴグラムでは AC 得点が高く我慢して感情が内にこもる性格の者に見られた。PSRS 得点が高い者は、実際に臨床実習を経験しても性格的にストレス源に対して立ち向かっていくための自我の発達に乏しいことや、性格的にストレスに対する効果的な対処行動がとれないことから、結果的には心理的ストレス反応だけが高まっていくのではないかと考えられる。

また、臨床実習の一期間においてのみ PSRS 得点が高い者は、臨床実習中に何らかのストレス源が発生して、効果的な対処行動がとれないまま臨床実習が終了したことが推察される。

今後このような学生に対する心理的援助のあり方を検討するうえで、臨床実習におけるストレス源を調査することが必要である。実のある臨床実習を提供するためには、どのようなことがストレス源となっているのかを PSRS と関連させながら、対象者を増やして検討したい。

文 献

- 1) 頼藤和寛 (1993) ストレス論再考。作業療法, 12(3), 202-205.
- 2) 新名理恵, 坂田成輝, 矢富直美, 本間 昭 (1990) 心理的ストレス反応尺度の開発。心身医学, 30(1), 30-38.
- 3) 谷田部順吉 (1975) 谷田部・ギルフォード検査。岡堂哲雄編, 心理検査学—心理アセスメントの基本—, 初版, 垣内出版, 東京, pp269-281.
- 4) 末松弘行, 和田迪子, 野村 忍, 俵里英子 (1992) エゴグラム・パターン—TEG 東大式エゴグラムによる性格分析—, 初版, 金子書房, 東京.
- 5) 淡野義長, 田邨文彦, 宮本謙二, 上野真美 (1994) 学生の性格特性とストレス耐性度に関する調査。作業療法, 13(特), 372.
- 6) 淡野義長, 田邨文彦, 片岡愛子 (1995) 学生の性格特性・ストレス・ライフスタイルに関する調査。作業療法, 14(特), 370.
- 7) Marlys MM and Charlene MK (1993) Student coping strategies and perceptions of fieldwork. *American Journal of Occupational Therapy*, 47(6), 535-540.